戦後70年 生きる伝える

第1回　食糧事情

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦を迎え、ことし、その日から70年の年月を経ました。終戦直後に生まれた人も70歳という年齢を迎え、戦争の記憶も薄れていくばかりです。幼い頃に戦争を体験した成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さんから当時の生活の様子を聞き取り、今後、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返すことのないため、ここに紹介することとなりました。

戦時中は20歳に達した男子は誰もが徴兵検査を受けることが義務付けられ、合格した者には召集令状が届き各連隊に入営していった。父や兄弟が入営する際、赤飯を炊き家族でお祝いしたのを子ども心に覚えている。

そして、どの家も残されたのは女性、子ども、老人そして病人だけ。働き手は減り、収入もなく、食糧を手に入れることも難しく、ひもじい思いの連続だった。街中に住む人たちは少しでも食料を確保するため、空き地に小さいながらも畑を作り細々と野菜を育てた。それでも、十分な収穫が得られるわけでもなく、空腹のときには道端に生えている雑草までもゆでて食べた。

米はもちろんのこと味噌、砂糖、小麦粉、トウモロコシの粉、サツマイモの粉などは配給制となった。戦争が長引くにつれ米の支給もなくなり、代わりに家畜の餌といわれたコーリャンと呼ばれるモロコシの一種が支給された。赤飯のように赤く見かけは美味しそうだったが、口にするとボソボソして、そのまま飲み込むのにも苦労するものだった。

豊住地区などの農村地域では、街中ほど食料の確保に苦労はなかったようであるが、供出米の量も年々増え、自分たちが食べる米を確保するのも苦労するようになっていった。豊住で生まれ育った日暮淑さんは、子どものころ大きなリュックを背負って、野菜の買い出しに連れて行かれた。その大きなリュックに入れられたのは野菜ではなく米だった。いわゆる闇米である。なぜ野菜の買い出しに出掛けたのに米を買うのだろうと思ったが、子どもの荷物は検査を受けない。そのため、闇米を買い出しに行く際には子どもが連れて行かれた。

戦時中農作業に従事する女性たち（成田の歴史アルバムより）

そんな苦しい中でも幸せを感じることもあった。当時寺台で幼い頃を過ごした佐藤弘子さん。ある日、母が知人から氷砂糖を分けてもらい宝物のように持って帰ってきた。氷砂糖で蜜を作り、くず粉でくず餅を作ってくれた。久しぶりに口にした甘いくず餅。こんなにおいしいものがあったのかと感激した。今でもあの味を忘れることはできない。そんな話をすると友人が次の話をしてくれた。疎開先で東京の母親からお手玉が送られてきた。そのお手玉の中には小豆ではなく、当時、貴重な大豆が入っていた。母親が苦労して手に入れた大豆を炒ってこっそりお手玉の中に隠し送ってくれたのだ。その友人は、夜中に布団の中でこっそり食べた。おいしかった。母親の愛情を感じ、涙を流しながら食べた。あの時の大豆の味は今でも忘れられない、と…。

語り部の皆さんは、戦争中、苦しい中にも家族が仲良く分け合って食事をし、近所の人々と助けあって生活をした当時の事が時折とても懐かしく思い出されるそうである。それは、今現在、何に不自由なく、満ち足りた生活を送れているからなのだろうか。

今回の聞き取りに協力いただいた成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さん

編集後記

ことしも市内各所で夏祭りが盛大に催されています。子どものころ小遣いを握り締めて友達と繰り出し、歯に青のりを付けながらお好み焼きを食べ、いちごのかき氷で舌を真っ赤にし、射的や型抜きに興じ、浴衣姿の同級生の女子にドキドキしていました。あれから数十年、今はもうそのお祭りもなくなってしまいましたが、大切な思い出となっています。夏も残りわずか、良い思い出を残せるよう一瞬一瞬を大切にお過ごしください。

平成27年8月15日号　No.1297

成田市のホームページ
http://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD（ユニバーサルデザイン）フォントを使用しています。

平成27年8月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111（大代表）